

君津市九十九坊廢寺趾の調査

— 古代寺院昭和60年度第2次確認調査の報告を中心に —

栗田 則久

1 はじめに

重要遺跡確認調査事業の一環として、古代寺院の確認調査が昭和56年度の成東町（現山武市）真行寺廢寺跡を皮切りに平成元年度の八日市場市（現匝瑳市）大寺廢寺まで9か所の調査が実施された。今回取り上げる君津市九十九坊廢寺趾は昭和59年度に実施され、昭和60年3月に報告書が刊行された。この報告では、2か所の基壇建物を塔と講堂とし、法隆寺式の伽藍配置が想定された。

その後、昭和60年9月2日～9月30日まで、当財団による追加の確認調査が実施された。その目的は、発掘届によると「昨年度の調査で確認できなかった金堂・中門の所在を明らかにする。また、前年度の調査で講堂跡に隣接して検出された掘立柱建物群の性格を明らかにするための発掘調査を実施する」としていた。しかし、この調査成果についての正式な報告はなされておらず、『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和60年度—』（千葉県教育庁文化課）に、約200㎡の確認トレンチにより、基壇と中門跡の検出と布目瓦の出土の記載があるだけである。

一方、昭和61年に開催された『第9回君津市文化財研究発表会』の中で、「九十九坊廢寺趾の調査」と題した報告が調査担当者である森本和男によって行われた。この報告が昭和60年調査を考える上での唯一の資料である。調査の目的とした金堂については、想定した位置からは見つからず、講堂とした建物の西側に隣接する掘立柱建物跡の調査は土地の関係で実施されなかった。また、南端部のトレンチから、「はっきりとした版築状の掘り込み基壇ではなく、黒色土の上にローム土を盛り、つきかためるといふ簡単な構造をみせる、新たな基壇を検出している。この基壇建物についておそらく中門であろう」としている。

以下では、未報告となっていた昭和60年の調査について報告するとともに、昭和59年の調査報告書を補足する形で再検討する。

2 昭和60年調査の報告

① No.26トレンチ（図1・3）

昭和59年調査で講堂とした基壇建物（以下「基壇」とする。）の南東端部に、講堂東辺部を確認するための長さ2.2m、幅1.0mの東西方向のトレンチを設定した。現表土面から0.8mほど掘り下げた面で建物基壇の版築が確認された。検出面上部はかなり攪乱が激しく、基壇上面は耕作等により削平されているようである。確認される版築の上位は、黒色土とローム粒を多く含む暗褐色土が厚さ3～4cmで互層に搗き固められている。トレンチ西側を部分的に掘り下げた断面では、版築の下位はやや層が厚くなり、ロームの土も確認される。掘り方底面はやや凹凸が認められる。

本トレンチでの大きな成果は、トレンチ東壁から0.4mほど西側で基壇の掘り込み端部を検出したことである。昭和59年度調査で明らかではなかった基壇の東辺が確認できたことになる。この結果、基壇の掘り方は、南北15.4m、東西22.7mを測り、基壇上面の削平により礎石等の位置は確認できないが、東西棟建物が想定される。

② No.20北側・21トレンチ（図1・3）

当初想定された金堂の所在を明らかにするためのトレンチで、No.20トレンチの北側と直行するNo.21トレンチを設定した。調査の結果、遺構と思われる掘り込みはなく、土層も自然堆積の状況を呈する。当初想定した金堂はこの位置に所在しないことが明らかとなった。

③ No.19・No.20南側・22～25トレンチ（図1・3）

これらのトレンチは、中門の所在を明らかにするために設定した。北側の東西方向のNo.22トレンチは、No.20北側やNo.21トレンチ同様、遺構は確認されず、自然堆積層であった。南端の南北方向のNo.19トレンチは攪乱が著しく、遺構等は確認されなかった。No.20トレンチ南側・23～25トレンチはほぼ同様の堆積状況を呈するが、No.23トレンチとNo.24トレンチの深掘りした土層から、11a層とした黒褐色土上にロームブロックの堆積が観察される。おそらく、No.23と24トレンチの交点付近にロームブロック土が積まれたものと思われる。

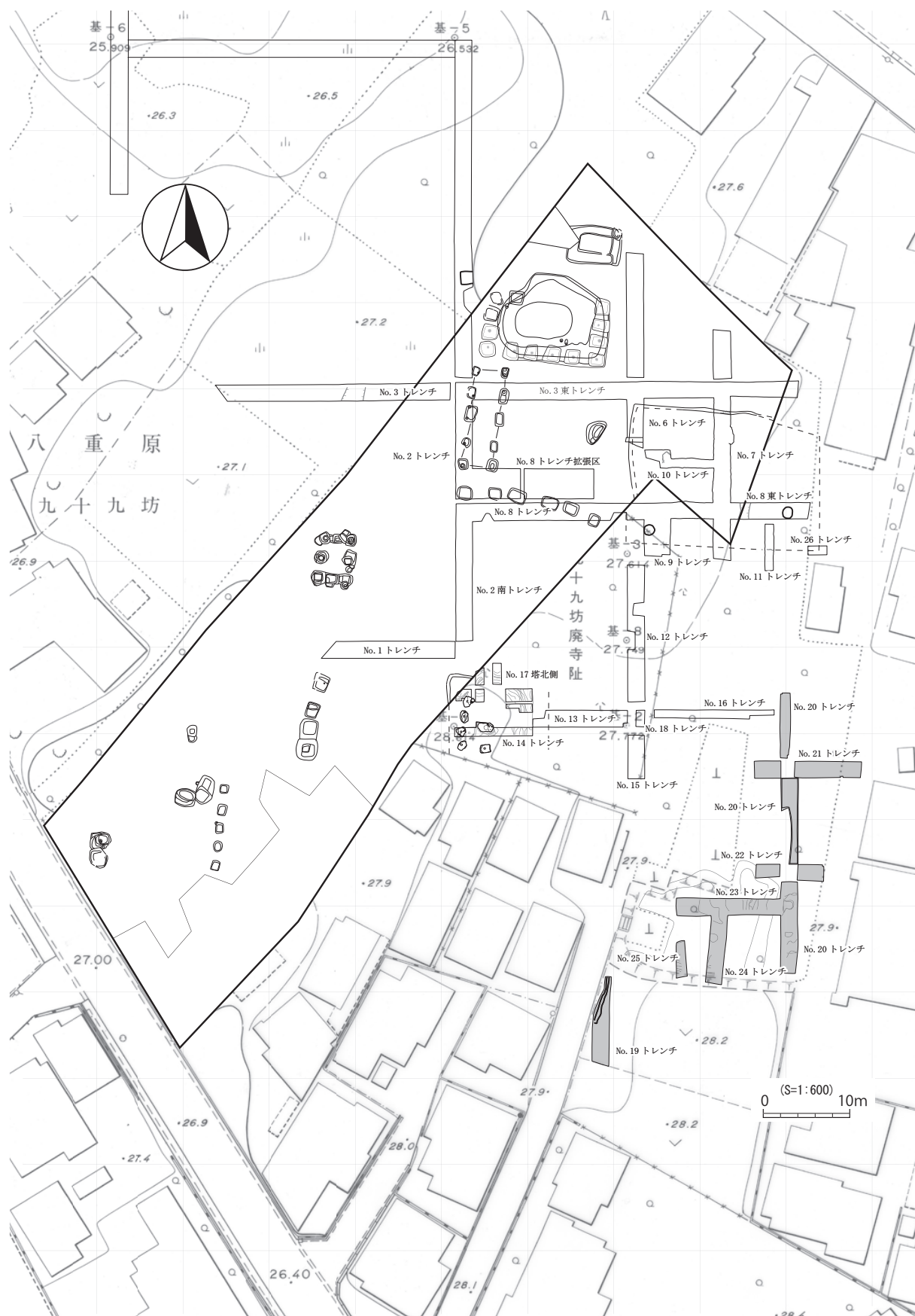
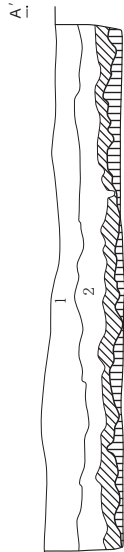


図1 九十九坊廃寺址全体図（太枠内君津市調査範囲） ※君津市調査成果と合成（曾我2025）

No. 20トレンチ



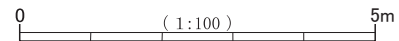
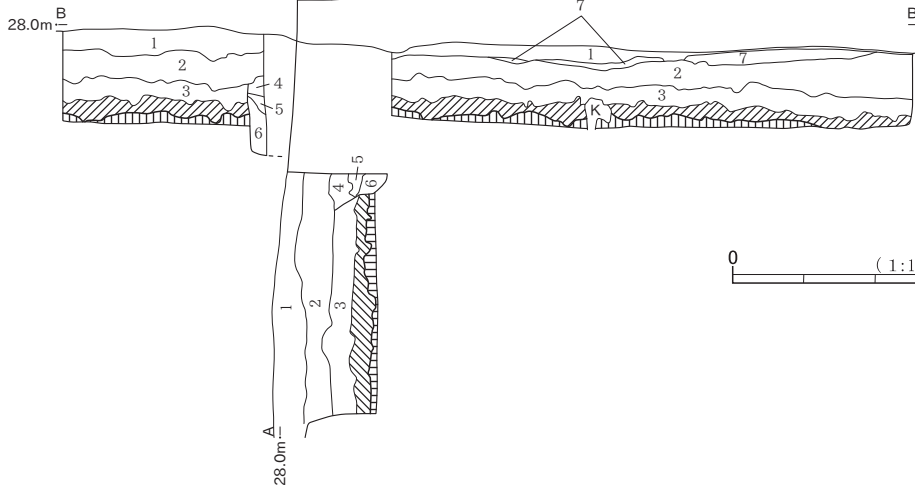
No. 20トレンチ～No. 25トレンチ

- 1 表土
- 2 黒褐色土 1 とほぼ同じ。しまり弱い。
- 3 黒色土 ややしまりあり。
- 4 暗褐色土 ローム質土を含む。しまり弱い。
- 5 ローム質土 暗褐色土を含む。しまり弱い。
- 6 暗褐色土 ローム質土を含む。下層ほど粒が大きくボソボソになる。
- 7 薄黄色砂 山砂。小石を含む。
- 8 茶褐色土 ロームを主体とする。しまり強い。
- 9 暗灰褐色土 山砂を少し含む。
- 10 暗茶褐色土 ロームを少し含む。ややしまりあり。
- 11a 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまり強い。
- 11b 黒褐色土 しまりなし。

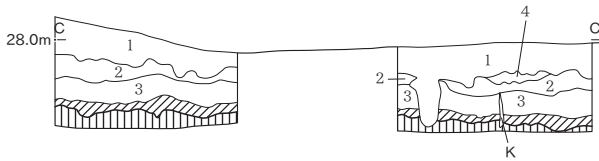
暗褐色土。ローム層への漸移層。

ローム層。地山。

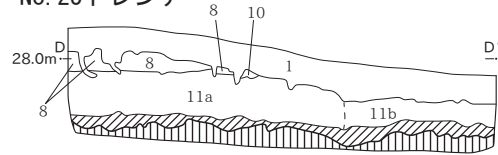
No. 21トレンチ



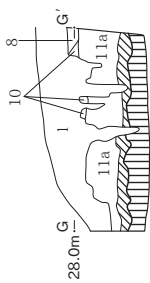
No. 22トレンチ



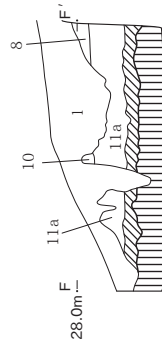
No. 23トレンチ



No. 25トレンチ



No. 24トレンチ



No. 20トレンチ

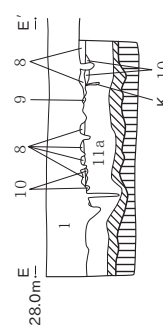


図2 No.20～25トレンチ土層断面図



写真1 No.20トレンチ北側北部分土層断面



写真2 No.20トレンチ南側



写真3 No.20トレンチ南側土層断面



写真4 No.21トレンチ西側土層断面



写真5 No.22トレンチ西側土層断面



写真6 No.21トレンチ東側土層断面



写真7 No.23トレンチ西側



写真8 No.23トレンチ土層断面



写真9 No.24トレンチ土層断面



写真10 No.25トレンチ土層断面

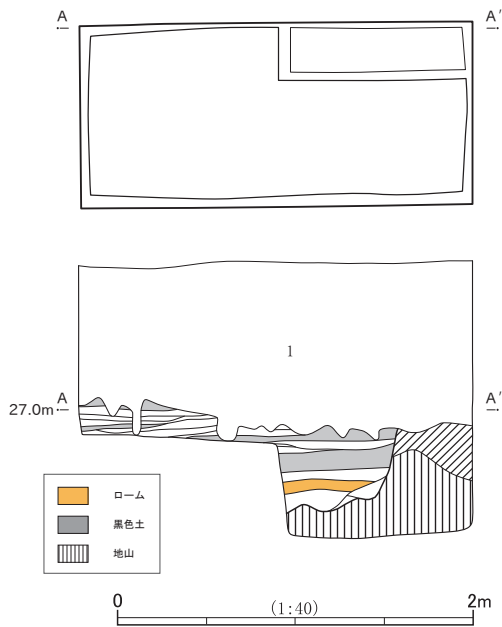


図3 No.26トレンチ



④ 出土遺物

図示した遺物はすべてNo.23トレンチからの出土である。1は土師器の火舎香炉の蓋と思われ、天井部の一部のみ遺存する。天井部内面に煤の付着が部分的に見られる。2は土師器杯あるいは皿の底部片である。内外面とも摩耗が激しく、調整は不明である。胎土は砂質を帯びる。3は土師器の高台付き杯で、口縁部を欠く。内面は黒色処理される。4は用途不明の土製品である。

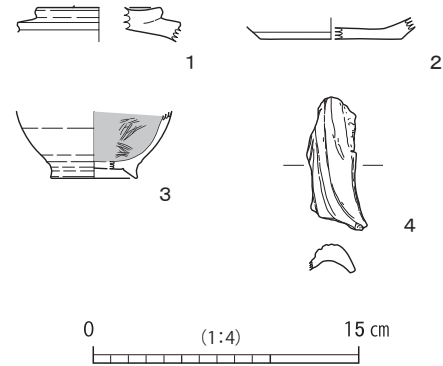


図4 No.23トレンチ出土遺物

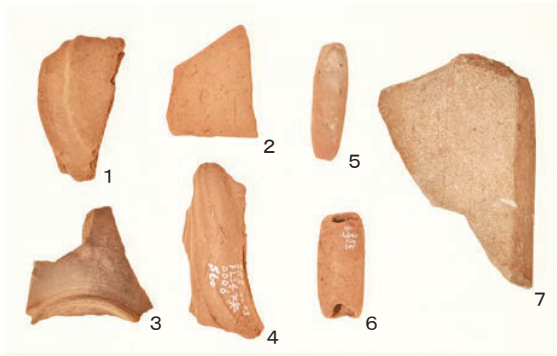


写真11 No.23トレンチ出土遺物

図示していない5・6は管状土錘、7は砥石である。

2 昭和59年調査の補足

昭和59年に当財団が確認調査を実施した地点については、令和5・6年に君津市教育委員会の宅地造成に伴う調査が行われ、その成果は令和7年に報告書として刊行されている。ここではその成果を加味して昭和59年調査成果を再検討することとする。なお、昭和60年3月に当財団が刊行した報告書では、一部挿図中の土層説明が省かれていたため、今回はそれを加えた土層断面図を再録することにした。

① 塔 (図5)

塔の東側に設定したNo.13トレンチで、複数の基壇版築端部が確認される。トレンチ西側端から2.2mほど東側の掘り込みラインが塔基壇の版築端部と思われる。

また、トレンチ東側の掘り込みラインは塔建立以前に施された何らかの地業となろう。この地業について、永沼律朗は「塔を建てるにあたり、当初、広い範囲で基礎工事が行われ、最終的に塔を建てる場所に丁寧に基礎工事がやり直されたことが考えられる」としている(永沼1998)。

君津市調査では、塔の北西側を部分的に調査し、基壇の北西コーナーを検出している。報告では、版築の中に小礫を含む砂質土が確認され、昭和59年の調査による塔の版築とは異なる層であることから、塔より古い基壇となる可能性を想定している(曾我2025)。

昭和59年調査や君津市の調査のみでは、塔基壇の範囲等を判断する根拠資料が十分であるとは言えず、心礎や側柱礎石を中心とした更なる確認調査が必要であると思われる。



写真12 No.13トレンチ西側土層断面 (部分)

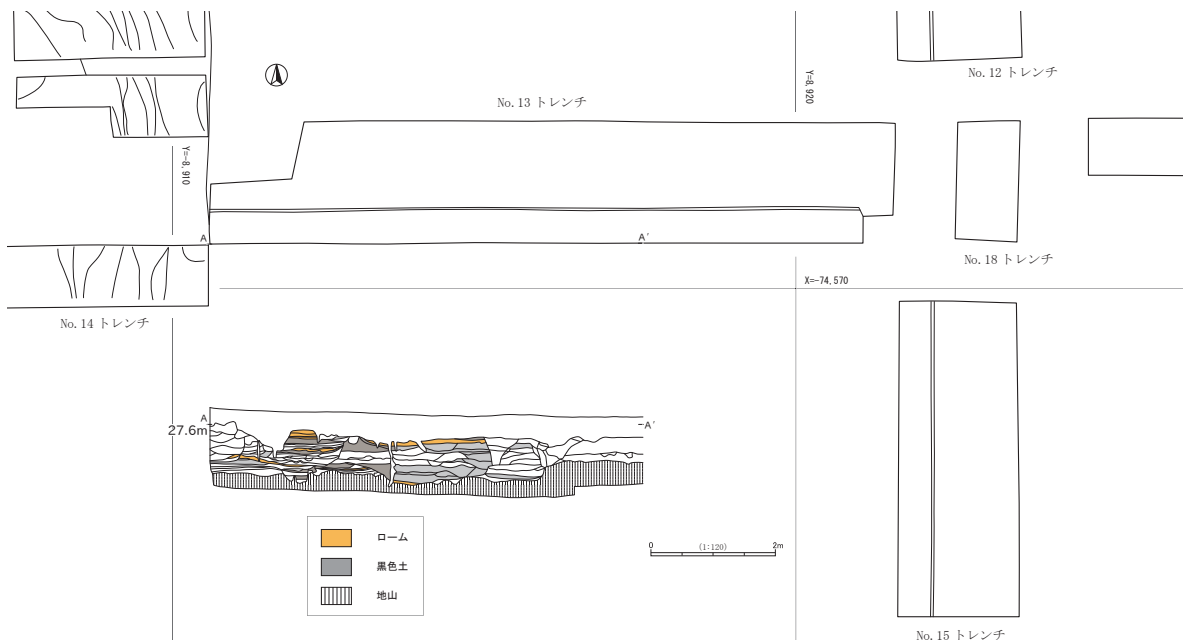


図5 No.13トレンチ



図6 No.7 トレンチ・君津市調査 ※君津市調査分(曾我2025に加筆)

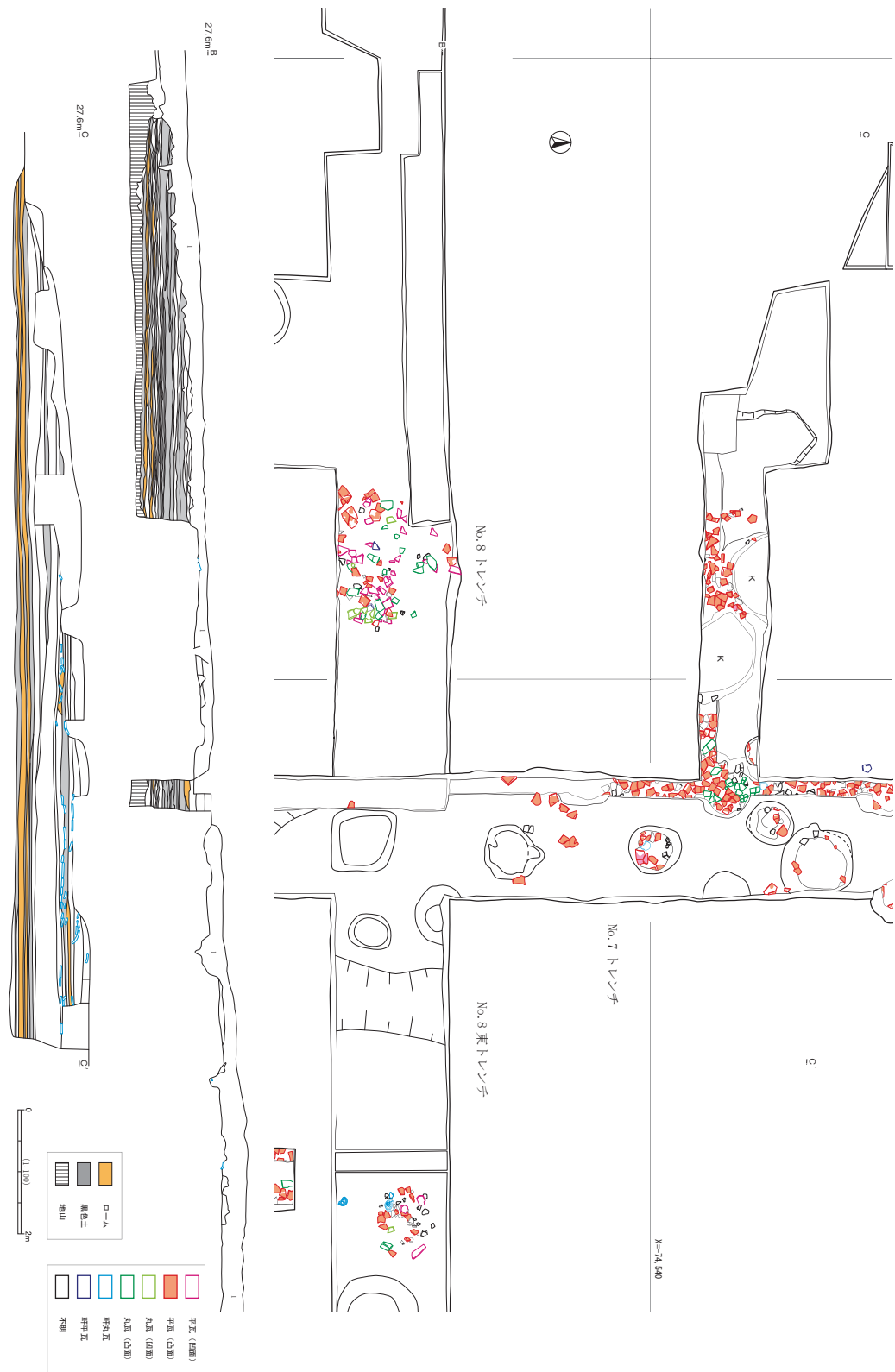


図7 No.8 トレンチ・君津市調査 ※君津市調査分 (曾我2025に加筆)



図 8 No.6 トレンチ

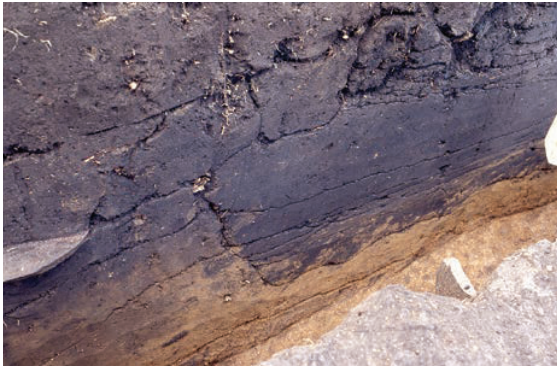


写真13 No.7トレンチ南側基壇南端部



写真14 No.7トレンチ南側土層断面



写真15 No.7トレンチ北側土層断面



写真16 No.7トレンチ北側基壇北端部



写真17 No.8トレンチ中央土層断面



写真18 No.8トレンチ中央ガラス玉出土状況



写真19 No.9トレンチ瓦出土状況



写真20 No.11トレンチ瓦出土状況

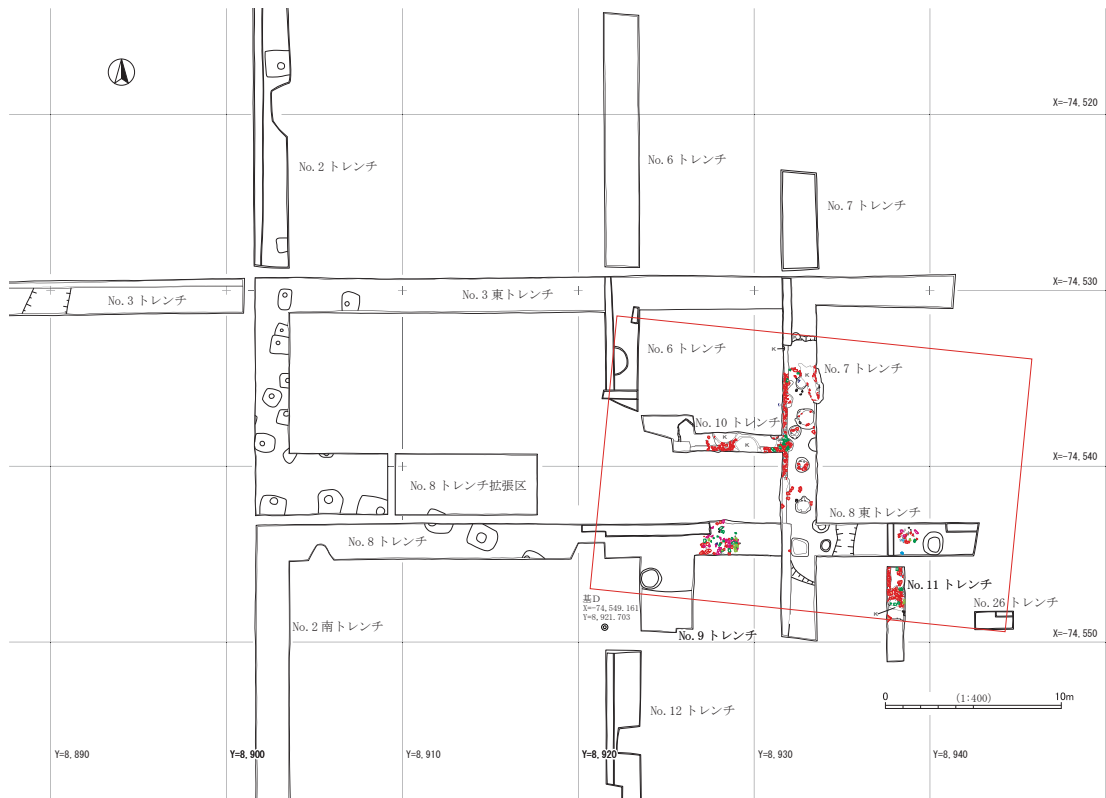


図9 基壇建物付近 (赤粋基壇範囲)

② 基壇建物 (図6～9)

報告書で講堂とした地点では、No.6～11トレンチが設定された。財団調査時点でわずかな高まりが確認されているが、君津市調査時には観察されていない。No.8トレンチ断面図の表土上面をみると、西側に比べて東側が0.4～0.5mほど高くなっており、昭和59年の調査から令和5年開始の君津市調査までの間に削平されたものと思われる。

基壇中央部の南北方向のNo.7トレンチ西壁と、君津市調査分の南北方向の土層断面図はほぼ同じ位置で作成されている。No.7トレンチの北側と南側のサブトレンチで基壇の北端部と南端部が確認されており、ローム層を掘り下げて基壇を造成していることがわかる。また、基壇最上面も攪乱及び削平があったことが認められる。君津市調査分の断面図はNo.7トレンチの基壇を掘り下げていない部分にほぼ相当することから、君津市調査分を投影することにより基壇版築の様相を伺うことができる。現表土直下にローム土の硬化面が厚さ6～10cmでほぼ水平に見られ、その下に瓦敷き面と黒色土を主体とした版築が検出されている。君津市調査による瓦敷きは3面確認されているが、瓦敷きの層位を検討した結果、財団調査のローム硬化層直下で出

土した瓦敷きは第2面、北側の一段低い面の黒色土硬化面から検出された瓦敷きは第3面に相当するものと思われる。

基壇の南側に東西に設定したNo.8トレンチは、君津市調査のC-C'の土層断面位置から南に6.0mほど離れた地点に相当するため単純に比較できないが、トレンチ東側のサブトレンチ東端に見られる瓦は黒色土硬化面中の瓦敷き第3面、やや東側の表土直下に見える瓦は第1面あるいは第2面の瓦敷きの一部となろう。版築の様相はNo.7トレンチとほぼ同様である。本トレンチ中央付近に設けられたサブトレンチからガラス玉1点の出土が確認できた。このガラス玉の出土は報告書の記述はないが、今回の執筆に際して、現場で撮影された写真や図面を調べていく中でガラス玉の存在を確認した。当該ガラス玉の所蔵については残念ながら現時点では確認できていない。ただ、写真の観察では、正確な位置は不明であるが、基壇上位の版築層の中からの検出であることは明らかであり、版築造成段階で意図的に埋められたものと想定される。このガラス玉の出土は、基壇建物の性格を考える上での資料となる可能性がある。

No.3東トレンチの中央付近から南に延ばしたNo.6ト

レンチ南端部の2か所のサブレンチを掘り下げたところ、北側では基壇の北辺、南側では基壇西辺の端部が確認された。攪乱が著しいため、基壇上部は大きく削平されているが、版築状況はNo.7・8レンチと共通する。No.11レンチは土層断面図が作成されていないが、平面図及び写真から、瓦が段差をもって丁寧に敷かれた状況を見ることができる。レンチ東側の瓦敷きはロームの版築上に置かれており、第1面に相当する可能性が高い。また、西側のサブレンチ内や南側の瓦は第2面及び第3面となるものと思われる。

3 まとめ

昭和60年の調査の目的の一つである金堂を特定するためのNo.20・21レンチの確認調査では遺構の検出はなく、建物が存在していなかったことが明らかとなった。

一方、南側隣接地に設定したNo.20南側レンチと23～25レンチは攪乱が著しく、遺構としての掘り込みは確認されなかった。その状況が伺えるNo.20レンチ南側とNo.23～25レンチのサブレンチの土層写真を見ると、図2の11a層の黒色土層は自然堆積層であり、その上の8層のローム土は塔や講堂の薄く搗き固められた版築とは異なり、後世に黒色土を削平した後人為的に盛られた可能性が高く、中門は検出されていないこととなる。

昭和60年調査による大きな成果は、講堂とされた基壇建物の東辺をNo.26レンチで検出した点である。君津市報告では、昭和59年調査と君津市調査の成果から、東西22.74m、南北15.43mの規模が示されている。図9では、No.26レンチの状況から、南壁の南側に接する位置で基壇南東コーナーを想定した。この場合、東西23.4m、南北15.5mの基壇となる。この基壇上に建てられた建物については、財団報告では「講堂」とし、君津市報告では伽藍配置の再考の余地があると考え「基壇建物跡」としている。基壇最上部が削平され、礎石等の建物を検討するに十分な資料が明らかでないため、ここではその性格を判断することはできないが、森本が「講堂と解釈された建物が、金堂である可能性もでてくる」（森本1986）と述べているように、「金堂」となる可能性も検討する必要がある。

また、君津市の塔北西部の調査で検出された基壇は、塔建立以前の「塔跡下層基壇」とするなど、九十九坊廃寺跡の基壇建物についてはまだ明らかとなっていない部分が多く残されている。今後は、塔基壇の検討に必要な追加調査、未調査部分が残る遺跡東側の調査な

どの成果を踏まえて更なる検討を加える必要がある。

調査で作成した平面図は日本測地系による基準点測量に基いて作図していたため、すべての平面図をデジタルトレースした後に、国土地理院がWEB上で公開するWeb版TKY2JGD Ver.1.3.80 (<https://vldb.gsi.go.jp/sokuchi/surveycalc/ky2jgd/main.html>) を使用して世界測地系へ座標変換を行った。本論中の図は、(公財)千葉県教育振興財団文化財センター今泉潔氏に作成いただきました。また、遺跡の内容や資料提供などについては、今泉氏及び君津市教育委員会生涯学習文化課曾我真実子氏・當眞紀子氏に協力いただきました。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 曾我真実子 2025『-君津市-九十九坊廃寺跡Ⅹ 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』君津市教育委員会
- 千葉県教育庁文化課 1987『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報-昭和60年度-』
- 永沼律朗 1998「九十九坊廃寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 森本和男 1985『君津市九十九坊廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 森本和男 1986「九十九坊廃寺跡の調査」『第9回君津市文化財研究発表会』